

①授業から学んだこと

私の教育実習期間は 2 週間と比較的短く、通常 3 週間で行う内容を凝縮して取り組むような形となった。そのため、実習 1 週目の水曜日からすぐに授業を担当することとなった。また、実習の開始が定期テストの直後だったこともあり、授業見学を行うことができないまま初めての授業を迎えることになった。

1 回目の授業では、まず指導教官がテスト返却を行い、その後の約 20 分間を私がひとりで前に立って話すことになった。しかし、この時間について事前に聞いておらず、何の準備もないまま話すことになってしまった。自己紹介の後、何を話すべきか分からなくなり、動揺したまま言わなくてよいことまで話してしまうなど、反省点の多い時間となった。ただ、振り返ってみると、予期せぬ場面でも話せる力を鍛える貴重な経験になったと感じている。

授業では、1 年生の「公共」と 3 年生の「政治・経済」を担当した。両者は一部内容が重なる部分もあったため、指導案の作成や雑談のネタを考えるうえで助けになった。一方で、2 年生を担当する機会はなかったが、1 年生と 3 年生を比べると、わずか 2 年の差で生徒の落ち着きや理解力、指示の通りやすさに大きな違いがあると実感した。特に 3 年生は非常に大人びており、成長の大きさを感じさせられた。

また、同じ学年でもクラスによって雰囲気や反応に違いがあることも興味深かった。1 年生は 3 クラスを担当したが、授業の進度や内容は同じであっても、生徒の反応の仕方や授業中の空気感には差があり、クラスごとに授業方法を柔軟に変える必要性を感じた。話す内容や言葉遣い、テンションなどをそのクラスに合わせて調整することで、授業の盛り上がり方が変わってくるという点に気づかされた。

授業内容としては、「近代立憲主義」「日本国憲法」「新しい人権」「議会制民主主義」などを扱った。現代の私たちにとっては当然とされている制度や価値観が、過去の多くの犠牲や努力によって築かれてきたものであることを生徒たちに理解してもらい、今後それをどう守っていくかを考えてもらいたいと考えていた。しかし、テーマがやや堅苦しく、生徒にうまく伝えきれなかった点は反省している。今後は、「授業内容を踏まえた上で本当に伝えたいことは何か」「それをどうすれば伝えられるのか」を常に問い続け、授業を構成していく力を高めていきたいと感じた。

授業見学については、私が担当した「政治・経済」は他の先生が担当していなかったため見学ができず、「公共」も指導教官以外には 1 人しか担当されていなかったため、結果的に「歴史」の授業を見学することが多くなってしまった点は少し悔やまれる。

その中でも、特に印象に残っている授業が 2 つある。1 つ目は「公共」を担当していた先生の授業で、パソコンを使ったクイズ形式のゲーム (Quiz let Live) を取り入れていた。生徒がランダムにグループ分けされ、グループ対抗でクイズの正解スピードを競うという形式で、生徒たちは非常に盛り上がっていた。ICT 機器をうまく活用し、授業内容に関連した形で生徒の学びを深めている点が非常に参考になった。

私自身の学生時代には ICT 機器の活用はほとんどなかったため、生徒が持つ端末の機種や使い方が分からず、自分で取り入れるのは難しいと感じていたが、この授業を見て、現場での実践例を通して学ぶことができた。

2つ目は「歴史」の授業で、PowerPoint 以外の ICT 機器は使用していなかったものの、生徒が誰も寝ることなく、楽しみながら授業に参加していた。話の合間に近くの生徒と話し合う時間を定期的に設けており、生徒の様子をよく観察しながら、適宜名前を出して声をかけることで、生徒を巻き込む姿勢が印象的だった。授業中の雑談も内容と自然につながっており、先生のキャラクターが授業の雰囲気をつくっていると感じた。これらの授業を見学して感じたのは、「授業に正解はない」ということだった。自分のキャラクターやスタイルに合わせた授業づくりが大切であり、同時に、生徒にとって面白く、学びのある授業であることが求められる。自分の「こうしたい」という軸はぶらさずに持ちつつ、その軸から派生する工夫を重ねていくことが、良い授業につながると学んだ。加えて、私は授業に関して「面白い」か「分かりやすい」の2つに分けて考えており、実習期間では「分かりやすい」に焦点を当てていた。しかし、面白いが分かるに繋がる場合もあるため、どちらかに焦点を当てるのではなくどちらも取れるような授業方法だとより良いと感じた。

②生徒との交流の中で感じたこと

授業前後の休み時間や昼休み、HR、放課後という限られた時間でしか生徒と接することは出来なかったが、その時間の中でも好いてくれる生徒は多くいたため、時間の量ではないのだなと思った。生徒の中にも実習生という新しい人に興味がある生徒、ない生徒に分かれており、興味がある生徒の中でも話しかける生徒と見ている生徒の3パターンに分かれており、コミュニケーションが多くとれたのは実習生に興味があり話しかけてくれる生徒ばかりであった。特に、実習後半になってようやく関係が築けてきた生徒もあり、最初の段階から積極的に声をかけていれば、より多くの生徒と深く関わることであったのではないかと反省している。

また、生徒との何気ない会話の中から、その子の性格や関心、日常生活の様子を知ることができ、それが授業づくりや声かけのヒントにもなった。授業という限られた場面だけでは見えてこない生徒の一面を知るためにも、授業外でのコミュニケーションの大切さを改めて実感した。

③職員室の様子から学んだこと

職員室では、先生方は常にパソコンと向かっており、教科書を開きながら授業の PowerPoint を作成しており、常に教材研究を行っている様子だった。また、授業以外では生徒にかかわる内容の話をしており、常に授業や生徒のことを考えている様子だったように感じる。職員室の様子を観察して感じたのは学年や教科を超えた先生通しの関わりも密であったことである。教員同士の連携や協力が学校運営の要であると実感した。また、先生の仕事量の多さにも驚かされた。特に進路指導や生徒指導に着いて印象に残っている。実習生の控え室は教育相談室3という教室であり、控え室を囲む教室も教育相談室であった。実習の途中から周りの教育相談室が頻繁に使用されるようになった。ある生徒が停学処分になったらしくその生徒が別室登校という形で教育相談室で指導を受けてい

た。また、もう1つの教室では、学校を辞めたい生徒がいたらしくその生徒も教育相談室で相談を受けていた。毎授業入れ替わりで様々な先生が指導や相談を担当しており、授業や職員室外での業務量も多いと実感した。加えて、授業後に評価を聞きに行った際、体調不良の生徒の保護者が迎えに来て、保護者対応を行っていた。授業や授業準備だけでなくその他の多岐にわたる業務を同時並行でこなしており、その忙しさの中でも私たち実習生の指導や生徒との関係性を大切にしている姿勢に強い責任感とプロ意識を感じることができた。このような職員室の雰囲気を体験して、教員という仕事は「個人戦」ではなくて「チーム戦」であるという意識がより強まった。

④ 事前に立てた目標及び課題について

事前に立てた目標は、特に大きなものではなく、「教育実習をとにかく乗り切るぞ」という程度の意気込みであった。実際に実習が始まると、慣れない環境で慣れないことをこなさなければならず、思うようにいかない毎日にすぐ心が折れてしまった。最初の3日間は、毎日泣きながら帰宅し、泣きながらパソコンに向かうような日々が続いた。しかし、日が経つにつれて少しずつ慣れ、授業に対する指導も次第に減っていった。最終的には、生徒と共にのびのびと授業を行うことができたのではないかと感じている。実習を通して見えてきた大きな課題は、「わかりやすさ」を追求するあまり、話が長くなったり、たとえ話が多くなりすぎたりしてしまったことである。「面白さ」と「わかりやすさ」のどちらかを選ぶとすれば、私は無意識のうちに「わかりやすさ」に重きを置いていたが、その結果として、生徒にとっては退屈に感じられる場面もあったのではないかと反省している。実際には、「面白さ」から「わかる」へとつながる場面も多くあるため、どちらか一方を選ぶのではなく、両方を取り入れられるような授業や話の内容を構成するべきであると感じた。実習を乗り切ることができたことに加え、明確な課題とその改善策を見つけることができた点においても、事前に掲げていた目標は大いに達成できたと考えている。

⑤ 教育実習全般にわたって

HRについて述べたい。担当したクラスは、普通科の3年生であった。実習期間中には実力テストが実施されたほか、最後の学校行事に関わる準備なども行われており、生徒にとって進路や思い出作りの両面から重要な時期であったと感じる。実習初日の終礼からHRを担当することとなったが、その際に指導教員から「読む」と「伝える」は異なるという指摘を受けた。連絡事項をただ音読するだけではなく、それが何を意味し、どのような影響を生徒にもたらすのかを意識させる必要があるという指導であった。この言葉は非常に印象深く、HRの在り方を根本から考えさせられるきっかけとなった。実習期間中の連絡事項は、進路指導や奨学金の申請、今後の進学準備に関する内容など、生徒の将来に直結するような重要なものが多かった。こうした情報を、生徒が「自分に関係のあること」として真剣に受け止め、主体的に考えられるように促すことが、HRの大きな役割であると実感した。短いHRの時間の中で、自分の言葉で「伝える」ことの難しさも痛感した。原稿通りに読むのではなく、自分自身がその情報の意味を理解し、納得した上で、自分の言葉で生徒に伝えなくてはいけない。その際には、言葉の選び方や話すテンポ、目線、声のトーンまでもが影響する。生徒にとって何が大切で、どのように伝えれば心に届くのかを常に考えながら話すことは、想像以上に高度な技術を要するものであった。連例が近いと

ということもあり、自分の経験談を話す場面も多々あったが、生徒にとってためになる話だったのだろうかとも今でも懸念している。つたないHRだったと感じているが私の言葉が生徒の誰かに響いているといいなと実習を振り返って思う。HRを通して、「情報を届ける」こと以上に、「生徒と向き合う姿勢」の大切さであると学んだ。一方的に伝えるのではなく、生徒がその情報をどう受け取るか、どのように行動につなげていくかを見据えて発信することが求められると実感した。限られた時間の中でも、生徒一人ひとりの将来に寄り添う言葉を選ぶことが担任として出来るHRの活動であると感じた。

⑥ その他

教育実習を終えて、事前の準備と臨機応変な対応が教師には求められると強く感じた。担当した教科は「公共」と「政治・経済」であり、いずれも現在の社会の基礎となる重要な内容を扱うため、教材研究だけでなく、日常生活に関わる話題と結びつけて説明する工夫が必要であると実感した。授業では、制度の機能や仕組み、構成といった基本的な原理を丁寧に説明することも重要であるが、それだけではどうしても面白みに欠けてしまう。生徒が興味を持ちやすい身近な話題(最新のニュースや実習校の出来事など)を授業内容に関連づけて取り上げることが、生徒の関心を引きつけるうえで有効であると感じた。そうした話題は一見すると雑談のようにも思えるが、それらを的確に授業の本題と結びつける力が教師には求められる。そのためには、日々の中で身近な話題を収集する力と、それを適切に活用する力の両方を磨いていく必要がある。また、今回担当した単元は、法学部に所属する私にとって専門分野であり、自身の専門性を活かした話をもっと取り入れてもよかったのではないかと振り返っている。専門的な内容に対して、生徒全員が興味を持つとは限らないが、一部の生徒にとっては進路や将来への気づきにつながるきっかけとなる可能性がある。そうしたきっかけを提供できることも、教育の大きな魅力の一つであると感じた。生徒が何に興味を持つのか、どのような話を面白いと感じるのかは、教師からは完全に予測することはできない。だからこそ、教師自身も日々試行錯誤を重ねながら、生徒と共に成長していくことができる。教育とは、そうした手探りの中にこそ価値があると実感する実習であった。